

「古鏡記」が映し出す歴史観

はじめに

中国の「小説」は、六朝時代に盛んに編まれた世にも不思議な奇怪な出来事を記録する営み（志怪）によって発展してきた。古い「小説」のテキストを編纂し中国小説史を概観した魯迅が指摘するように、六朝志怪では変化怪異の話が史実として記されていたが、唐代伝奇になると、作者が物語の構成を考え内容も虚構（幻説）を交えて書き始めたという^①。特に唐代伝奇は、安史の乱後、社会情勢が不安定となった中唐の時期に、科擧合格によって官僚となった士大夫層によりしきりに書かれるようになったことは周知の事実である。これらは文語で書かれ、作者も読者も限られた士大夫層であったと思われる。また、登場人物の多くが六朝以来の門閥貴族出身と

宮岸 雄介

（国語国文学〈中国語〉学科目）

（令和七年一月六日受理）

設定されていることも注目を引く。ただ、唐代伝奇は今日の文学作品のように単に娯楽として読まれていたのか、あるいは自分たちの文章力を高めるための練習として書かれたのか、はたまた自らの文章力を誇示宣伝するために科擧試験官に見せるものだったのか^②、中唐期に爆発的に書かれていながら、その執筆の動機、記録意義などは詳しく解明されていない。唐代伝奇の代表作は唐詩の時代区分でいう中唐（七六六―八三五）の時期に集中していることは事実であるが、その円熟した表現や内容とは質を異にするものの、唐初の頃から唐代伝奇は書き始められていた^③。

門閥貴族であった太原の王氏の血筋とされる王度なる人物の作という「古鏡記」もその一つである^④。「古鏡記」は王度という人物を

主人公に、彼が見聞した出来事を彼自身が語るというスタイルで書かれているが、王度自身の存在自体が文献上明確に特定しきれていない。そのため、「古鏡記」の成立時期は、王度の架空性やその表現内容の特質から中唐の作品であるという説もあり、今日にわかに唐初のものであるとは断言できないのが実情である。

「古鏡記」の内容を見ると、いろいろな怪奇な話があたかも史実のように年代とともに並べられているものの、集めた事実をそのまま載せる六朝志怪と違って、一人の人間が次々と不思議な体験を重ねていくという一連の物語としてまとめられている。一人の人間の体験としてはあまりに奇怪な出来事が多く続きすぎるため、これはもはや真実ではなく虚構として作られたのではないかという印象を受ける。しかし、中唐期の作品のように、ある結末へ導くひとつの物語として展開が希薄で創作としての意図的工夫に乏しい。また、登場人物の行動も事実の羅列がほとんどで物語の描写としての精彩を欠く。要するに、虚構の物語の完成度としては、まだ六朝志怪のように奇怪な出来事を単に記録として残そうとしていた意識から脱却できず、むしろ六朝志怪から唐代伝奇への過渡期としての作品だと位置づけるのが妥当のように思われるのである。目下成立時期についてにわかに結論を出す論拠を示すことは難しいが、内容を見る限り上述のとおり志怪から伝奇への過渡期の作品であろうということとを前提として、本論では「古鏡記」に込められた伝奇作家の執筆意図の一端を明らかにしていきたいと思う。

中唐の伝奇は、士大夫仲間が集まった折に、物語をし合いながら、その面白いものを文にまとめて楽しむといった面が確かにあったようである⁵⁾。一方、「古鏡記」を読む限り、物語として洗練されていないこと、羅列的な構成からは中唐の伝奇とは違った様相がみとめられることなどから、これをまとめた動機が中唐の伝奇とは別のものがあつたのではないかと考えられる。六朝志怪から唐代伝奇への過渡期的な存在と捉えるならば、「古鏡記」のいかなる部分が伝奇に継承され、いかなる部分が両者では異なるのかを明らかにすると、中国の「小説」発展の様相の一端が明らかになるであろう。もともと歴史書として話題が集められることから始まっている「小説」は、歴史書との関係が深い。作者も史官経験者が多く（「古鏡記」の作者王度も『隋書』編纂をする史官であつた）、その書式体裁も歴史書に倣って書かれる特徴から逸脱していない。すなわち、志怪と伝奇との懸隔には、双方の歴史群像の捉え方の違いがあり、その継承と刷新に発展の軌跡が求められるのではないか、というのが本論の着眼点である。そこで、これより「古鏡記」が志怪の延長にあるという特質に着目して、「古鏡記」の作者の執筆動機をその歴史観から考察していく。

一、

「古鏡記」は隋を舞台にした物語である。隋末の大業七年（六一一）から大業十三年（六一七）までの六年間に、太原の王氏

一門であつた王度が手に入れた古鏡で各地の魑魅魍魎を退治していく。物語は大きく二つに大別され、前半は王度自身が古鏡を使う怪異譚、後半はその弟王績（「古鏡記」の中では「王勣」と表記⁶）が仙人になるための修行の旅に出た話である。その時王績は兄度の古鏡を拝借して、霊山や名所で妖怪退治をしたり自然現象を変える魔術を使つていく。そして最後に鏡の精のお告げを受けて帰郷すると、古鏡は大業十三年（六一七）七月十五日に悲鳴を上げて消えてなくなつてしまふのであつた。そして、奇しくもこの年は、李淵が即位して、国号が隋から唐に代わる一年前、すなわち隋朝滅亡の時期にあたる。「古鏡記」の作者が、隋が滅びる直前の六年間に物語の時代を設定したことはいかなる意味を持つのであろうか。また、この年は一族きつての儒者であつた王通（王績の兄）が亡くなつた年であつたことも記憶しておきたい。

太原の王氏は、隋から唐初の時代にかけて注目すべき文人を輩出する名家であつた。特に北魏の頃には名門は五姓七族（清河の崔氏、范陽の盧氏、趙郡の李氏、隴西の李氏、滎陽の鄭氏、太原の王氏）と称され、太原王氏は名門一族の誉れ高かつたのである。当時名を成した人物に、「古鏡記」の主人公王度の弟で時に素王、孔子にもなぞらえられた大儒の王通（五八四～六一七）⁸、そして「古鏡記」の後半の主人公王績（字は無功、五九〇～六四四）がいる。王績は隠逸詩を多く残しているように、官途から外れる志向をしていた。怪異な世界をより解する人物だったようで、王績が後半の主人

公になることは、伝奇の彩りをより豊かにするために意図的になされていたと考えられる⁹。王通の孫には初唐の四傑の一人、王勃（字は子安、六五〇？～六七五）がいる。しかし、彼らは決して唐王朝の創業期には、もはや政治的にも文壇の中でも主流派ではなく、むしろ異端な存在であつた。唐初の政界では、以下のような事件が起きている。

貞観初、仲父太原府君為監察御史、彈侯君集、事連長孫太尉、由是獲罪。時杜淹為御史大夫、密奏仲父直言非辜、於是太尉與杜公有隙、而王氏兄弟皆抑而不用矣。（王福時「錄東皋子答陳尚書書略」）

貞観の初め、王凝（太原府君。王通の弟で、王績の兄）が監察御史となつて侯君集を弾劾すると、当時の政局のリーダー格であつた長孫無忌と事を構えることになり、罪を得ることになつてしまった。時に杜淹が御史大夫で王凝に罪が無いことを伝えるも、これが原因で長孫無忌と杜淹の関係も悪くなり、王氏の兄弟は皆抑えられて登用されなくなつてしまった。

という記録が示す通り、唐初の王氏は中央政界の主流派と折り合いが悪く王氏兄弟は皆登用が抑えられてしまつていた状況であつた。そのため、唐代に『氏族譜』が編まれる時、名門一族を一般に崔・盧・李・鄭の四姓として、それに太原の王氏を加えて五姓と呼

び習わしていたと言う。¹⁰ こうした認識からも窺えるように、太原の王氏は往時の五姓七族の勢いを失い、四姓にも入れられず、それにあえて加えるとしたら勘定に入れられるという存在となっていた。登用が難しくなった状況下に、初唐の四傑に数えられた王勃が出てくる。しかし、生来の浮薄な行いが災いして朝廷から再三罰せられ、最後は交趾（ベトナム）へ流された父を尋ねる途中に船から落ちて死んでしまうという破天荒な末路を歩んだ。¹¹ その後、太原の王氏は没落の一途を辿ったようである。「古鏡記」は、没落していく太原の王氏の隋末の時期にあつて、その功績を書き伝えておこうという意図があつたのではないだろうか。

侯生常云。昔者吾聞黃帝鑄十五鏡。其第一橫徑一尺五寸、法滿月之數也。以其相差、各校一寸。此第八鏡也。雖歲祀攸遠、圖書寂寞、而高人所述、不可誣矣。昔楊氏納環、累代延慶。張公喪劍。其身亦終。今度遭世擾攘、居常鬱快。王室如燬、生涯何地。寶鏡復去、哀哉。今具其異跡、列之於哀哉後。數千載之下、倘有得者、知其所由耳。（「古鏡記」¹²）

侯生はいつも言っていた。「昔私は黃帝が十五の鏡を鑄造したと聞く。その一つ目は直径が一尺五寸で、満月の数に法っている。それぞれの差は一寸ずつ小さくなっている。これは八番目の鏡に当たる。」と。遙か昔のことで、図書に記録はないものの、侯さんのような高名な方が述べるのだから間違いではな

いだろう。昔漢の楊宝が玉環を納めていたため代々栄えてきた。晋の張華は宝劍を失つてその身を滅ぼした。今世の中は争乱の時に遭い、日常は心が晴れない。王室は荒れ果てて、生きる場がどこにあるか。私も宝鏡を失つて、なんとも悲しい限りである。今その鏡の軌跡を詳しく述べ、これを悲しみの後ろに並べることにする。数千年後に鏡を得る人があれば、その由来を知るだろう。

名門の家には、家宝として神器と言えるものがあり、太原の王氏にも宝鏡があつた。それは占いを得意とする名人侯生より授かつたもので、かの黃帝が鑄造したという由緒正しき魔鏡である。「古鏡記」は作り話であろうが、作者はここで王氏も漢の楊宝、晋の張華¹³と同じように神器を持ち合わせていたが、今無くしてしまったと言う。ここで宝鏡の不思議な出来事を後世に残すことが、「古鏡記」を書いた動機であると言うが、これは単なる六朝志怪までの怪異譚の収集のような目的ではなく、一族の輝かしき足跡を後世に伝えようとしていたように考えられる。物語は、王氏が一族の権威を示す宝鏡を保持していること、それを使って次々と妖怪を退治すること、一族の往時の輝かしい活躍を彷彿とさせるようにしたように読め、さらに「古鏡記」は宝鏡喪失で終わるが、これは隋王朝滅亡とともに太原王氏の凋落の意味を含ませていることも読み取れるからである。これより、「古鏡記」が映し出す物語から、そこに込めら

れた一族の思いが現れている内容を考えていきたい。

唐初の貞観年間、王凝は長孫無忌と確執が生じたことは、先に引用で見てきたが、その背景として王氏の気風にはそもそも唐初の学術と相容れないものがあつた。王氏は代々北魏などの北朝に仕え、その学風も北学の系譜を継いでいた。貞観の治で知られる唐の太宗は、法制度の整備のみならず学術の統制整備も行つたことは周知のとおりである。特に儒学の発展に着目していた。

太宗は即位前の武徳四年（六二二）に宮城西に文学館を開き、十八人の学者を招き、文献典籍について議論をした。¹⁴『貞観政要』が伝えるように、太宗の人材登用の特徴は、最初から自分に仕えていたもののみならず、自分に対する敵軍に属していても最後までその主人に忠誠を尽くした人物をも重用するものであつた。この十八学士も、敵軍すなわち前隋朝側に仕えていた人物を多く呼び入れている。さらに、十八学士のうち七名が南朝出身者で、唐の学術文化は南朝のものが主流となる傾向があつた。¹⁵文学も南朝の修辭を重んじる四六駢儷体など文壇を席卷したため、これに対する反発が中期の古文復興の思想へと結実していくのは歴史の示すとおりである。唐初の学風の違いは、

暨永明、天監之際、太和、天保之間、洛陽、江左、文雅尤盛、彼此好尚、互有異同。江左宮商發越、貴於清綺。河朔詞義貞剛、重乎氣質。氣質則理勝其詞、清綺則文過其意。理深者便

於時用、文華者宜於詠歌。此其南北詞人得失之大較也。（李延寿『北史』卷八十三文苑伝序）

と、唐初の史家李延寿が端的に説明するように、南朝は音楽性や清らかで綺麗な文章を尊び、北朝は言葉の意味、表現の質実さを求め、氣質を重んじていたという。王氏の家学はまさしく後者で、南朝の学芸の風潮とも相容れず自身の学風を守り続けるのが王氏の立場であつたようである。「古鏡記」で、宝鏡の王度に渡る前どこにあつたのかを述べる所で、以下のような興味深い話が見える。

其年冬、兼著作郎。奉詔撰國史、欲為蘇綽立傳。度家有奴曰豹生年七十矣、本蘇氏部曲。頗涉史傳、略解屬文。見度傳草、因悲不自勝。度問其故、

謂度曰。豹生常受蘇公厚遇、今見蘇公言驗、是以悲耳。郎君所有寶鏡、是蘇公友人河南苗季子所遺蘇公者、蘇公愛之甚。蘇公臨亡之歲、戚戚不樂。常召苗生謂曰。自度死日不久、不知此鏡當入誰手。今欲以著筮一卦、先生幸觀之也。便顧豹生取著、蘇公自揲布卦。卦訖。蘇公曰。我死十餘年。我家當失此鏡、不知所在。然天地神物。動靜有徵。今河汾之間、往往有寶氣與卦兆相合、鏡其往彼乎。季子曰。亦為人所得乎。蘇公又詳其卦云。先入侯家、復歸王氏。過此以往、莫知所之也。豹生言訖涕泣。

度問蘇氏、果云舊有此鏡。蘇公薨後。亦失所在、如豹生之言。故度為蘇公傳、亦具言其事於末篇。論蘇公著筮絕

倫、默而獨用、謂此也。〔古鏡記〕

その年の冬（六一二年）、著作郎を兼任し、國史編纂を命じられ、蘇綽の伝を立てようとした。（王）度の家には豹生という七十歳になる使用人がいて、もと蘇氏の家臣であった。よく史伝に通じていて、ほぼ文の読み書きができた。（王）度の伝記の草稿を見て悲しみに耐えられないふうであった。（王）度がそのわけを尋ねると、

「私がかねがね蘇公の厚誼を受けてきており、今蘇公が言っていた験を見たため悲しむのです。あなたが所有する宝鏡はもとと蘇公の友人河南の苗季子が蘇公にあげたもので、蘇公はそれをととても愛しておりました。蘇公が亡くなる年に、物悲しく不快なご様子で、苗さんと呼んで言いました『私が死ぬ日がそう長くないことがわかり、この鏡が誰の手に渡ってしまうのか分かりません。今筮竹で占ってみるのであなたもこれを見ていただきたいと思います。』と。そこで私豹に著を持って来させ、蘇公は自分で占いました。占い終わると、蘇公は言いました。『私が死んで十年あまりしたら、我が家でこの鏡を失い所在が知れなくなります。しかし、天地の神物ゆえ、動きには兆候が現れます。今黄河・汾水の間に往々にして宝氣があたり占いの兆しと一致しています。鏡はそこに行くでしょう。』と。苗季

子が言いました。『人の手に渡るのですか。』と。蘇公はまた詳しく占って『まず侯氏に、さらには王氏に行き着きます。それを過ぎると分からなくなります。』と。豹氏は言い終わると泣いた。

（王）度は今の蘇氏に尋ねてみると、果たしてもともとこの鏡はあったと言う。蘇公が亡くなったあと、行方が分からなくなっていて、豹さんの言うとおりであった。そのため、（王）度は蘇綽の伝を書いた時に、このことを終わりに詳しく言及した。蘇綽は占いにひときわ通じており、人知れずにその能力を使うとはこの事を言うのだと論じた。

いささか長い引用になったが、もともと蘇綽（四九八―五四六）のもとに宝鏡があったという設定は、太原王氏の家学の学風を權威づける上で重要である。蘇綽は始め西魏に仕え宇文泰とともに富国強兵を推し進め、政治改革を進めた人物である。蘇綽の一つの功績として、

自有晉之季、文章競為浮華、遂成風俗。太祖欲革其弊、因魏帝祭廟、羣臣畢至、乃命綽為大誥、奏行之。〔周書〕卷二十三 蘇綽伝

と述べられているように、文章の改革がある。晋末以来、文章は浮

華なものが争うように書かれることが習慣となつてしまった。太祖はその弊害を改めようと、魏帝の祭廟に群臣がごとくやつてくするため、蘇綽に命じて「大誥」を作りこれを奏行させた。「大誥」とは『尚書』大誥の文章のことで、太祖は蘇綽に儒家の經典の文体を普及させることを命じたのである。こうした発想は、太原王氏の思想に通じるものがあつた。隋末の大儒と称される王通の『中説』に、

子謂、「文士之行可見。謝靈運小人哉。其文傲、君子則謹。沈休文小人哉。其文冶、君子則典。鮑昭、江淹、古之狷者也。其文急以怨。吳筠、孔珪、古之狂者也。其文怪以怒。謝莊、王融、古之纖人也。其文碎。徐陵、庾信、古之誇人也。其文誕。」或問孝綽兄弟。子曰、「鄙人也。其文淫。」或問湘東王兄弟。子曰、「貪人也。其文繁。謝朓、淺人也。其文捷。江摠、詭人也。其文虛。皆古之不利人也。」子謂、「顏延之、王儉、任昉、有君子之心焉。其文約以則。」（王通『中説』事君篇）

王通の『中説』は『論語』の体裁を模したもので、王通自身が「子謂」として、対話形式で自説を述べている。『論語』を模している段階で、すでに文章は古文志向であるが、右の引用箇所では、謝靈運、沈約を皮切りに、鮑昭、江淹、吳筠、孔珪、謝莊、王融、徐陵、庾信と南朝を代表する文章家をことごとく否定している。ま

た、劉孝綽・孝威兄弟、謝朓、江摠の文章も人に利益を与えないと一蹴する。ただ、顔延之、王儉、任昉は君子の心があり、文章も簡約で規則性があると認めているのである。

こうした簡約で論理性のある文章、すなわち古典の文章を重んじる学風があつた太原の王氏が、宝鏡を蘇綽から引き継いだとわざわざ設定している意味は大きい。南朝文化を信奉する学者が主流であつた唐朝の宮廷にあつて、太原王氏一門は、北学を継承する一族で、しかも北朝で経書の文芸精神を体现した蘇綽から宝鏡を受け継いだということは、一族の正統性を説明するためには、何としても盛り込まなければならない話題であつたのである。

しかし、「古鏡記」のこの話柄は、冷静に読み直してみると、事実として齟齬したものであることに気がつく。すなわち、王度の家の使用人である豹生は七十歳あまりと言うが、彼が蘇綽に昔仕えていたというには、年代的に無理があるのである。蘇綽と王度の時代は離れすぎていて、二人を結びつけることは極端な作為を感じる。「古鏡記」は、年代順に出来事を並べ、史書の形式に沿つて書かれているものの、このように年代設定などが正確でない箇所が目立つ¹⁵。ここに作者の虚構を書こうとしている意識も看取できるのである。少し考えればすぐに分かつてしまう、不合理をそのまま書いてしまつてゐることは、作者はすでに虚構の物語を書いていて、そこには自分の主張したい内容があるということになるであらう。太原の王氏は、大儒王通のような儒学を信奉する一家では必ずし

もない。「古鏡記」の作品自体、合理的な志向を逸脱した虚構の世界であり、物語の後半の主人公となる王績は、むしろ道教的志向が強く、官にありながらも隠逸を求める異端児であった。儒家の道德を信念とする王通からすると、こうした弟の行為は身に余るもので、

無功作『五斗先生傳』。子曰、「汝忘天下乎。縦心敗矩、吾不與也。」（『中説』事君篇）

王績（無功）が『五斗先生伝』を作った。王通は「おまえは天下を忘れたのか、好き勝手に行動をして規則を守らない。私はこうした態度は受け入れられない。」と。

と、王通は弟績の常軌を逸した行動に苦言を呈している。六朝以来の士大夫の精神活動として、一人の人間に異質な道教と儒教が混在と存在することはよく見られることであるが、一族の兄弟内でも対立する価値観が同居しているのは興味深い事実である。

二、

次に「古鏡記」の後半の主人公である王績の物語を、隋朝を舞台とした他の伝奇小説と比較してみよう。

王績は、『新唐書』、『旧唐書』双方に立伝されており、ともに隠逸伝の最初に挙げられているように、当時隠者として名高かった。

「古鏡記」では、大業十年から十三年の三年間（六一四―六一七）、「山水に遊び、長往の策を為さん（神仙の道を極めよう）」として、旅に出るのである。本伝によると、大業中に孝悌廉潔科に挙げられ秘書正字を任じられたものの、六合の丞（現江蘇省六合あたりの県副知事）に移る。「古鏡記」の話は、この六合丞を辞めたあと「長往の策」を為すために旅に出た設定になっていた。しかし、王績は完全に官界から引退する隠者ではなく、東晋の陶淵明を範として、隠居と出仕を繰り返す市隠としてのスタンスを貫いた。陶淵明の「五柳先生伝」を模し、みずからも酒好きであったことから、「五斗先生伝」という自伝を書くほどであった。その全文を見てみよう。

有五斗先生者、以酒德遊於人間。人有以酒請者、無貴賤皆往。往必醉、醉則不擇地斯寢矣、醒則復起飲也。嘗一飲五斗、因以為號焉。（『五斗先生伝』）

酒の徳で世間を渡り歩き、酒づきあいであれば身分の貴賤に関係なく出かけていき酔えば寝てしまい起きればまた飲み、一度に五斗飲むのでこのように言われている、と完全に陶淵明の飲酒詩の境地に生きていることを述べている。

先生絶思慮、寡言語、不知天下之有仁義厚薄也。忽然而去、候焉而來、其動也天、其靜也地。故萬物不能縈心焉。嘗言曰、

「天下大抵可見矣。生何足養。而嵇康著論。塗何為窮。而阮籍慟哭。故昏昏默默、聖人之所居也。」遂行其志、不知所如。

〔五斗先生伝〕

五斗先生王績の生き方は、まさに老莊思想を実践したもので、無知無欲、道に法って万物と一体となつて泰然と生きていく。天下のことは大概わかったから、もはや生は大切にすることももないが、嵇康は『養生論』を著し、阮籍は母の死に慟哭しつくした。二人の生きざまはほんやりと何も語らず、まさに聖人の境地に達している。ついに志を實踐して行方がわからなくなった。

「古鏡記」では、仙人になる修行をしに出かけるが、自ら作った架空の自伝では、まさにその境地に達して生きる姿が描かれている。ここに描かれる生き方は王績の理想であつたと思われるが、若い王績は政治的情熱も兄王通に近い熱いものがあつたようである。友人呂才が書いた「王無功集」序（王績の文集の序）に、十五歳の王績の注目を引く話題が載せられている。

年十五遊於長安謁越公楊素。于時賓客滿席素覽刺引入、待之甚倨。君曰、績聞周公接賢吐瀡握髮。明公若欲保崇榮貴、不宜倨見天下之士。時宋公賀若弼早與君長兄侍御史度相善。至是起曰、王郎是王度御史弟也。正看今日精神足見賢兄有弟。（呂才「王無功集序」¹⁷）

十五歳の時長安に行き越公楊素に謁見した。その時賓客が席を満たしていたが、楊素は名刺を見て王績を引き入れた。しかし、とても傲慢に扱ったため、王績は言った。「あの周公は賢人に接するときには食べ切れないものを全て吐き出し、入浴して髪の水気を完全に切っていたそうです。あなた様がもし榮華と高貴さを尊ばれ続けようとするなら、天下の士を見下さない方がよろしいでしょう。」と。時に宋公の賀若弼がいて彼は早くから績の長兄である侍御史の度と仲が良かった。そこで立ち上がって言った。「王郎は王度御史の弟君です。本日の元氣ある姿を見れば賢兄に賢弟がいることがわかりましょう。」と。

若い王績はわざわざ長安に行つて、あたかも戦国の遊説の士のように、時の権力者に政策を主張しようとしていたのであつた。ここに出てくる楊素とは、隋末にあつて、不沈の激しい官歴を歩んだ権力側にいた人物である。北周から官にあり、隋の建国時に功績があり、文帝より上柱国を下賜され、越国公に封ぜられ、その後は煬帝にも取り立てられ司徒の地位にいたものの、引用文にあるような傲慢さが災いして楚公に左遷された。隋末に反乱を起こした楊玄感の父に当たる。時の有力者ではあるが、行動をとると危険な末路をたどることを暗示させる人物であつたのだろう。

唐代伝奇で隋朝を舞台にしたものに道士の杜光庭が作者とされる「虬髯客伝」もその一つである。「虬髯客伝」は隋末唐初に軍人で

あつた李靖（五七一―六四九）が、太宗の才能を見出して、その下で自らも歴史の中で活躍していく史実の陰に、望気の術をよくする仙人と先見の明がある妓女の暗躍があつたとする物語である。この物語の始まりも、興味深いことに楊素と李靖の面会から始まる。

隋煬帝之幸江都也、命司空楊素守西京。素驕貴、又以時亂、天下之權重望崇者、莫我若也。奢貴自奉、禮異人臣。每公卿入言、賓客上謁、未嘗不踞床而見、令美人捧出、侍婢羅列、頗僭於上。末年益甚。一日、衛公李靖以布衣來謁、獻奇策。素亦踞見之。靖前揖曰、「天下方亂、英雄競起、公為帝室重臣、須以收羅豪傑為心、不宜踞見賓客。」素斂容而起、與語大悅、收其策而退。當靖之聘辯也、一妓有殊色、執紅拂、立於前、獨目靖。靖既去、而拂妓臨軒、指吏問曰、「去者處士第幾。住何處。」吏具以對、妓領而去。（杜光庭？「虬髯客傳」）

隋の煬帝が江都に御幸した際、司空の楊素に長安の留守番を命じた。楊素は出自の貴さを驕り、また乱世において天下の権力も人望も自分及ぶものがないと思っていた。驕り高ぶることを自らやって、礼儀作法も人様と違えるようにしていた。重役が話に來たり客が謁見しに來るたびに、寝台から起き上がらずに会ったことがない。美人を侍らせ、侍女を並べ、ほとんど皇帝気取りである。晩年はますますひどくなった。ある日、衛公の李靖が一般人として謁見に來て珍しい政策を献上しようとし

た。楊素はまた横になったまま会うと、李靖は前に出て言った、「天下は乱れていて、英雄がせめぎ合う中、あなたは皇帝の重臣として豪傑をあまねく集めることに心がけるべきです。横になってお客に会うことはよろしくありません。」と。楊素は姿勢を正して起き上がり、ともに語り大いに喜び、李靖の政策を受け入れて退かせた。李靖が熱弁を振るっている時、一人の妓女が赤い払子を取って前に立ち李靖を見つめた。李靖が去ると、払子の妓女は軒先まで来て、役人に李を指さしながら聞いた。「いま出ていったお方は何番目の兄弟で、どこに住んでいるのですか。」と。役人は詳しく答えると、妓女は領いて立ち去った。

当時政治的に自らをアピールするのに手っ取り早かったのは、時の権力者であつた楊素だったのであろう。しかし、二つの物語の楊素が来賓に対する態度は無礼極まりなく、それに対して客が嗜めるという展開が、引用した二つの話では全く同じであつた。これは、伝奇に出てくる楊素像はこうした役回りとして定着していたものと思われる。官途をわたることに成功する人物は、こうした手合に見切りをつけていかなければならない。王績は次のステツプには順調に進まなかったが、李靖は続く唐代で頭角を現す。

「虬髯客傳」の李靖のその後の人生は歴史が示す通り、以後唐の太宗と邂逅して宰相にまで上りつめる。李靖は怪異譚と相性が高い

ようで、伝奇の不思議な経験をした登場人物として『太平廣記』には他の話にも登場する。太宗の卓越した人格者像を強調する立役者で、現実の世界でも唐王朝創業期を支えた人物なのであろう。「虬髯客伝」では、楊素のもとにいた妓女張が李靖に会ってその有望な才気に惚れ込み、現主人の楊素を「屍居余氣（生きた屍）」と言つて見切りをつけて李靖と駆け落ちをする。さらに靈石（現山西省）の宿で虬髯（みずちのような髯）の老人に出会う。李靖は妓女張を見つめる老人を不快に思うも、妓女張はその老人のただならぬ雰囲気には惹かれ、老人の姓が妓女と同じ張であつたことも手伝つて三人は意気投合する。虬髯の老人は太原に異人がおり、それを真人だと思ふと言う。李靖は李世民（のちの太宗）のことだと思い、知人を介して老人と李世民を会わせることに。老人は李世民を一目見ると真の天子であると言い、自分の全財産を李靖に託し、李世民をバックアップするように言つて去つていくという物語である。

これは完全な成功物語で、勝者が歴史を振り返つて自分の偉大さをアピールする歴史観によつて作り出されたものである。太宗礼賛の物語は、唐朝の要請で編まれた『隋書』や唐初に陸統と編纂された六朝の正史にも連なる歴史認識によつて書かれたもので、「古鏡記」とは全く逆の歴史観で描かれていると言える。また、最後の警句は安史の乱で問題となっている勢力を拡大して謀反を起こした節度使たちを戒めたもので、「虬髯客伝」は中唐以降に作られたことも明白である¹⁸。

一方、同じ隋末を描いた「古鏡記」の方は、一族が繁栄する歴史を歩まなかったため、太宗を顕彰する話など追加されるはずもなく、李淵が即位する一年前、隋朝の滅亡の年に物語は終わつていた。隋末の六年間、太原王氏とともにあつた宝鏡は、任務地の先々、神仙修行の道すがら、魑魅魍魎を退治して、その役割を終えて、姿を絶つてしまう。物語を隋末に設定しているのは、明らかに隋朝の滅亡を暗示し、宝鏡が失われる結末は、かつての王氏と隋朝の栄華と権威が失墜してしまつた悲劇を表している。これは唐以前に繁栄していた門閥貴族が終焉していくさまを、哀愁を込めて描いていたのである。

唐の官制の歴史は、唐王朝賛美、太宗の偉業の神格化という歴史的な眼差しで塗り替えられている。これも権力側が作り出した虚構の歴史であつた。一方で歴史の表舞台から退場を余儀なくされた門閥貴族の物語は、時間とともに淘汰され駆逐される運命にあつたのである。「古鏡記」が活写した王氏一族の奇怪な物語は、年代と地名、具体的な人物名を列記しながら、まことしやかに語るものの、よく読めば虚構の物語であることがわかる。王氏の殘党たちは、架空な官制史観が支配的な中、虚構で綴る伝奇を書き残すことによつて、未来永劫に一族の栄光を宝鏡で映し続けようとしたのである。

むすび

「古鏡記」は、「虬髯客伝」など中唐の伝奇に比べると、主題も不

明瞭で最後は鏡が喪失するという後味の悪い内容となっている。しかし、「古鏡記」はもともと『異聞集』に収められたものが『太平廣記』に収録される形で残っているものの、同時に単行の作品としても伝えられてきたという事実がある。これは、単独の物語として読みつがれてきたことを意味し、中唐の伝奇流行に向けて、少なからずその創作のヒントを与える役割を担ってきたことを表しているのではないだろうか。没落貴族となっていく太原王氏が、その祖先たちの活躍を宝鏡の怪異譚としてまとめつつも、往時の繁栄を記録に留めるノスタルジーが「古鏡記」には漂っている。唐代は門閥貴族が牛李の党争などを経て、完全に消えていく時代であった。六朝以来の貴族が減んでいくことを暗示した「古鏡記」は、かつて権勢を誇っていた門閥が宮廷内でも実際に力を失っていく姿を実見していた伝奇作家たちの想像力を掻き立てるモチーフになって行ったと思われる。そのため、伝奇の登場人物は、作者がすでに科擧合格した官僚たちであっても、時代に漂う退廃の主題として、登場人物たちはかつての門閥貴族出身に設定することが多かったのではないだろうか。

唐代の歴史は勝者の物語が大勢を占める中、隋末にすでに斜陽となっていた太原王氏の家族の記録は、門閥貴族の消えゆく未来を暗示するとともに、官制の歴史観では映し出されない隠れた真相を今に伝えてきたのであろう。

註

(1) 魯迅『小説史略』第八篇「唐の伝奇文(上)」に「胡應麟(『筆叢』三十六)云、「變異之談、盛於六朝、然多是傳錄舛訛、未必盡幻設語、至唐人乃作意好奇、假個說以寄筆端。」其云「作意」、云「幻設」者、則即意識之創造矣。此類文字、當時或為叢集、或為單篇、大率篇幅曼長、記載委曲、時亦近於俳諧、故論者每訾其卑下、貶之曰「傳奇」、以別於韓柳輩之高文。」と、胡應麟の『少室山房筆叢』を引いて、六朝志怪は「幻設」(虚構)を「作意」(故意)に作らなかつたが、唐代伝奇に至りわざと奇拔さを好んで小説にそれを描いたことを指摘している。また、「古鏡記」と太原の王氏については、小南一郎「王度『古鏡記』をめぐる―太原王氏の傳承―」(『東方学報』六十卷 一九八八)参照。

(2) 科擧受験生が事前に自らの文章力を試験官にみてもらうように、あらかじめ自作を提出する習慣を行卷という。これはおもに詩作においてなされた形跡がある。唐代伝奇も中唐にさかんになるが、それも行卷のような風習が原因しているのではという説もあるが、詩作と違ってその関係を証明する資料はない。

(3) 顧況の『広異記』序(『全唐文』卷五九二に収録)に「國朝燕公(梁四公傳)、唐臨(冥報記)、王度(古鏡記)、孔慎言(神怪誌)、趙自勤(定命錄)、至如李庚成、張孝舉之徒、互相傳說。」と、唐代になってから書かれ伝奇を列挙している。

(4) 魯迅の前掲書に「隋唐間、有王度者、作『古鏡記』見『廣記』二百三十、題曰『王度』、自述獲神鏡於侯生、能降精魅、後其弟勣(當作績)

遠遊、借以自隨、亦殺諸鬼怪、顧終乃化去。其文甚長、然僅綴古鏡諸靈異事、猶有六朝誌怪流風。王度、太原祁人、文中子通之弟、東臯子續兄也、蓋生於開皇初（宋晁公武『郡齋讀書志』十云通生於開皇四年）、大業中為御史、罷歸河東、復入長安為著作郎、奉詔修國史、又出兼芮城令、武德中卒（約五八五—六二五）、史亦不成（見『古鏡記』、『唐文粹』及『新唐書』王續傳、惟傳云兄名凝、未詳孰是）、遺文僅存此篇而已。續棄官歸龍門後、史不言其遊涉、蓋度所假設也。」と、「古鏡記」が隋唐の間、王度という人物の作になるものであると説明している。また、「古鏡記」は古鏡にまつわる怪異な記録を綴っただけで六朝志怪の雰囲気そのままとどめているとする。作者王度については、王通、王績の兄であるとし、實在が確かめられる王凝と王度が同一人物かどうかかわらないとしている。

（5）沈既済の「任氏伝」の最後に「建中二年、既済自左拾遺於金吳將軍裴冀、京兆少尹孫成、戸部郎中崔需、右拾遺陸淳皆適居東南、自秦徂吳、水陸同道。時前拾遺朱放因旅遊而隨焉。浮潁涉淮、方舟沿流、晝宴夜話、各征其異說。眾君子聞任氏之事、共深歎駭、因請既済傳之、以志異雲。沈既済撰。」とある。東南に左遷される船旅で、夜な夜な物語をしてそれぞれの珍しい話を求め合い、みな任氏の話を聞くに及び深く感嘆し、沈既済は物語に書くよう請われて書いたとある。

（6）王績を王勳と表記するテキストが多く、胡震亨『唐音彙鑑』の「唐詩人名誤者」に「勳」の字は誤字であると指摘があるが、後世の表記では「王績」に落ち着いているようである（川合康三『中国の自伝文学』（創文社一九九六）の注釈（十三）二七四頁参照）。ここでは「績」に統一して表記す

る。

（7）『資治通鑑』卷一四〇高宗明皇帝建武三年に「魏主雅重門族、以范陽盧敏、清河崔宗伯、榮陽鄭義、太原王瓊四姓、衣冠所推、鹹納其女以充後宮。隴西李冲以才識見任、當朝貴重、所結婚姻、莫非清望。帝亦以其女為夫人。（中略）時趙郡諸李、人物尤多、各盛家風、故世之言高華者、以五姓為首。」とある。

（8）『新唐書』卷一九六王績伝に「兄通、隋末大儒也、聚徒河、汾間、仿古作『六經』、又爲『中說』以擬『論語』。不爲諸儒稱道、故書不顯、惟『中說』獨傳。通知績誕縱、不嬰以家事、鄉族慶吊冠昏、不與也。與李播、呂才善。」と儒者としての業績が綴られている。しかし、『新唐書』、『旧唐書』ともに王通を単独の列伝として取り上げていない。

（9）「古鏡記」前半の物語にも王績は一度登場して、突然現れた胡僧の応対をしている。胡僧は王氏の家に宝氣が出ていることを知って訪ねてきて、この宝鏡には別に知られざる能力があることを伝える。物語の後半で、王績が鏡を持ち出したことも、そこで知った能力を発揮させる伏線になっている。胡僧との場面は、以下の通りである。「大業九年正月朔旦、有一胡僧行乞而至度家。弟勳出見之、覺其神采不俗、更邀入室、而為具食。坐語良久、胡僧謂勳曰、「檀越家似有絕世寶鏡也、可得見耶。」勳曰、「法師何以得知之。」僧曰、「貧道受明錄秘術、頗識寶氣。檀越宅上、每日常有碧光連日、絳氣屬月、此寶鏡氣也。貧道見之兩年矣。今擇良日、故欲一觀。」勳出之、僧跪捧欣躍。又謂勳曰、「此鏡有數種靈相、皆當未見。但以金膏塗之、珠粉拭之、舉以照日、必影徹牆壁。」僧又歎息曰、「更作法試、應照見肺腑、所恨卒無藥耳。但以金煙

薰之、玉水洗之、復以金膏珠粉、如法拭之、藏之泥中、亦不晦矣。」遂留金煙玉水等法、行之無不獲驗。而胡僧遂不復見。」

(10)『新唐書』卷一九九柳沖伝に「今流俗獨以崔・盧・李・鄭為四姓、加太原王氏號五姓、蓋不經也。」とある。

(11)『新唐書』卷二〇一に「勃既廢、客劍南。嘗登葛嶺山曠望、慨然思諸葛亮之功、賦詩見情。聞號州多藥草、求補參軍。倚才陵藉、為僚吏共嫉。官奴曹達抵罪、匿勃所、懼事泄、輒殺之。事覺當誅、會赦除名。父福時、繇雍州司功參軍坐勃故左遷交址令。勃往省、度海溺水、瘝而卒、年二十九。」と、王勃の一生が綴られている。

(12)『古鏡記』の原文は、『太平広記』卷三二「器玩二」に掲載されている「王度」に拠った。これは陳翰の『異聞集』から引用したもので、全体がまとまったものとしては唯一のテキストである。『郡齋讀書志』類書類によると、「古鏡記」一卷右末梓撰人。纂古鏡故事。」とあり、もともと単独に存在していたことがわかる。

(13)楊宝の話は『搜神記』卷二十に、張華のものは『晉書』本伝にそれぞれ見える。

(14)『旧唐書』卷七十二褚亮伝に「始太宗既平寇亂、留意儒學、乃於宮城西起文學館、以待四方文士。於是、以屬大行台司勳郎中杜如晦、記室考功郎中房玄齡及於志寧、軍諮祭酒蘇世長、天策府記室薛收、文學褚亮、姚思廉、太學博士陸德明、孔穎達、主簿李玄道、天策倉曹李守素、記室參軍虞世南、參軍蔡允恭、顏相時、著作佐郎攝記室許敬宗、薛元敬、太學助教蓋文達、軍諮典簽蘇勗、並以本官兼文學館學士。及薛收卒、復征東虞州錄事參軍劉孝孫

入館。尋遣圖其狀貌、題其名字、爵裡、乃命亮為之像贊、號『十八學士寫真圖』、藏之書府、以彰禮賢之重也。諸學士並給珍膳、分為三番、更直宿於閣下、每軍國務靜、參謁歸休、即便引見、討論墳籍、商略前載。預入館者、時所傾慕、謂之「登瀛洲」。顏相時兄師古、蘇勗兄子干。」とある。

(15)布目潮風『貞觀政要』の政治学(岩波書店 一九九七)序説参照。

(16)『古鏡記』に大業八年四月一日に日食が起きた話があるが、六一二年のこの日の前後に長安に日食が起きたことはないという。『古鏡記』白猿伝・遊仙窟(唐代上)(明治書院 二〇〇五)解説に、日食ソフトでの調査、『資治通鑑』、『隋書』の記述から確認できない論証がある。

(17)この引用箇所は、現存する呂才の「王無功集」序のうち四部叢刊本「東臯子集」や『唐文粹』卷九十三には略されている。北京図書館所蔵の陳氏晚晴軒抄本にのみ載せられている。王績の兄として王度の名前が唯一載せられている貴重な証拠となっている。

(18)「虬髯客伝」の終わりに、「乃知真人之興、非英雄所冀、況非英雄乎。人臣之謬思亂、乃螳螂之拒走輪耳。」と言う。真の為政者が国を起こすということとは、英雄が願うてできることではなく、ましてや英雄でないものにはできないはずがない。家臣の間違えた考えで反乱を起こすのはカマキリが走ってくる車を拒もうというようなものだと言評し、暗に安史の乱前後に暗躍した節度使勢力を批判している。